

Title	ルイス・フロイス著 柳谷武夫訳, 昭和三八年, 平凡社刊, 東洋文庫4 日本史I : キリシタン伝来のころ
Sub Title	Luis Frois, History of Japan, I, translated into Japanese by Takeo Yanagiya
Author	岩谷, 十二郎(Iwatani, Jujiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1964
Jtitle	史学 Vol.37, No.1 (1964. 6) ,p.109- 111
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19640600-0109">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19640600-0109</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 批評と紹介

ルイス・フロイス著  
柳谷武夫訳  
昭三八年平凡社刊

東洋文庫<sup>4</sup>

日本史 I

——キリシタン伝来のころ——

岩谷十二郎

キリシタン史研究を志す者にとつて、フロイスの名はザビエル、ワリニアノの名と共に常に脳裏にとどまっている。

フロイスは一五三二年リスボンで生まれ、一五四八年イエズス会に入会し、東印度でザビエルの影響を受けて一五六三年日本に渡来し、一五九七年永眠するまでの三十四年間、日本布教に従事した。

この時期は、日本のイエズス会の布教伸長時代であり、又日本史上嘗て見なかつた程の激烈な闘争が繰返され、為政者の交替が行なわれた時代であり、又大規模な外征が行なわれた時代でもある。

フロイスは主として京畿、後に豊後と長崎でこの時期の日本を観察し、詳細な報告をヨーロッパに送る一方、史壇を肥して

批評と紹介

いつた。彼の浩瀚な「日本史」は彼にしてはじめて著わされ得たものであり、史実の確実さを誇ると共に国史研究に重要な補遺を行なう役割りを負っている。

我が国では早くも大正末期、太田正雄博士の胸中にフロイスの組織的研究の抱負があつたと聞く(岡本良知氏「遺された覚書」木下奎太郎全集附録六号 岩波書店)。その後、主として岡本良知氏、近時は松田毅一氏により研究が進められ、特に複雑な「日本史」の構成については目覚ましい成果が挙げられている。(松田毅一氏「パードレ・ルイス・フロイス著「日本史」の研究」天理大学学報三十八輯、同氏「ルイス・フロイス著「日本史」の構成、写本並に内容一覧」日本歴史 昭和三十九年三月)。

本書のオリジナルは実にこの浩瀚な「日本史」の第一部であり、これは一五四九年から一五七八年までの記述と緒言から成り立っている。この部分はザビエル研究者として名高いシュールハンマー師により、ポルトガル語からドイツ語に翻譯され、本書はこのドイツ語訳を用いて訳出されたものである。なおこの日本語訳は四分冊として発刊される予定で、今回はその最初の部分として緒言と「日本史」第一部一章から二十三章までが一冊に収められて発刊された。即ちザビエル渡来にはじまり(一五四九年)、パードレ・ビレラが堺を発して比叡山へ赴いたこと(一五五九年)までが記されている。内容的にもう少し詳しく

見れば、殆んどが九州と山口に於けるイエズス会の活動の記述であり、最後の二章が京畿開教の準備の記述である。

フロイスは各章で、イエズス会士による布教の開始、仏僧との抗争、日本人社会とイエズス会士の態度、各地の大名の横顔、キリシタンの篤信等を仔細に描写し、以つて異質の土地に滲透していくキリスト教の姿を縦横無尽に浮彫りにしている。

更に当時の地理、交通事情、旅程にも自づと筆を走らせ、又大名の勢力争い、各種の戦乱とその原因、都市の荒廃ぶりにも触れ、当時の混乱した世の中の断面をありのままに覗かせてくれる。特に彼は各階層の日本人を観察しているが、その際、自己の觀察に頼る以外に、先輩、同僚の書翰を随時引用し、その公平さを読者に訴えるなどして史家としての態度を崩さずに終始している。ただ仏教及び仏僧に対しては非寛容的態度をとり、時には侮蔑、嘲弄さえしている。この点今日から見れば彼の史家としての限界を感じさせるところであるが、彼が宣教師であることと、シュールハンマー師の説くように、異つた宗教思想の世界や、アジアの芸術の神秘を理解しようとすることは、十六世紀のヨーロッパ人にとって考え得られなかったことであることに、意を注がなくてはなるまい。

しかし日本人の宗教的心情を見抜く力はさすがに鋭く、「……日本にはたくさんの宗派があつて、父はある宗派に、妻は別の宗派に、そうして子供たちはまた別の宗派に属し、しかもその

点で互に気まづくなることもなく、そのために纏れが起きることもないということがあつたが、誰かがキリシタンになると、そうでない人達が、忽ちその人に思い知らせるようなことをする……」と記している。

彼の叙述の特徴は極めて具体的に個有名詞、数字が使われていることである。例えば、府内の病院の記事中、「……一五五六年夏だけでも六十人以上が介抱された……」とあり、又ビレラが大坂を出発する際の記事には、「……ばあでれ一行はそこを出発し、みやこから三レグワの距離にある山崎という別の所に着いた。ここで乗船して川を溯り、六地藏という所まで来て、そこから徒歩で陸路、日本では非常に有名な諸邑、すなわち山科、醍醐へ寺へ、逢坂の関を経て、近江の国の大津という大きな町に着き、日本で非常に有名な三井寺という寺を訪ねた。〔この寺は〕もう非常に古く、往時の壮麗さと宏大さとは失われていた」とある。このような表現はやゝ冗長に過ぎるとの誹りを受けるかも知れない。事実、或る時にワリニアノはフロイスの構文の冗長と雑然さを指摘した程であるが(A. H. Cortes 565, f. 65)、今日の国史研究者にとつてはこの何気ない雑然さが何よりの考証の材料となつていたのである。

シュールハンマー師のドイツ語訳からの翻訳はさきに高市慶雄氏により日本評論社(昭和七年)からその一部分が刊行され、斯学の発展に貢献したが、何故か後半は刊行を見ずに今日

に至つた。この度柳谷武夫氏によりその全訳を見る機会を得たことはまことに喜ばしいことである。はしがきにもある通り、訳者は昭和九年から訳稿を起し、すでに幾度か稿を改めたとのことである。筆者も嘗てこのことを訳者より親しく聞き、首を垂れる思いであつた。思えば十二、三年前、学生の頃、吉田小五郎先生から本書の出版の話を伺つて以来、その時の来ることを待望し続けてきたのである。いつかは訳者の語るように、ポルトガル語の原文から訳出さるべきものであるが、それと共にこのドイツ語訳からの訳書もいつまでも利用されるであろう。何故ならば底本がフロイス研究の權威者でもあるシュールハンマー師の手で綿密に翻譯され、校註を施されたものであり、又閲歴からみて、この度最もふさわしい訳者を得たからである。

訳文は隅々にまで推敲のあとが見られ、新に柳谷氏の附した巻末の訳註と三葉の地図と共に本書を一層読み易くしている。氏は更にザビエル像、島津貴久像をはじめ、南蛮屏風中のバテレン像の写真を随所に挿入し、一般の読者の興味を誘うよう工夫を施している。この意味で本書は柳谷氏の人柄がにじみ出ていると評して間違ひなからう。二巻以下の続編の発刊が待たれる所以である。

終りに臨んで紹介が偏見に墮し、本書の真価を傷けることのあるを惧れる次第である。

批評と紹介

執筆者紹介

竹田龍児	慶応義塾大学文学部教授
森岡敬一郎	同 助教授
清水潤三	同 教授
高瀬弘一郎	同 助手
鈴木公雄	同 大学院博士課程
中井信彦	同 教授
高橋正彦	同 助手
岩谷十二郎	同 幼稚舎教諭